

論文審査の結果の要旨

マイコプラズマ肺炎はいわゆる市中肺炎の代表格であるが近年第一選択薬であるマクロライド系抗菌薬の耐性化の進行が懸念されている。本研究では同疾患の標準的診断手段のひとつであるLAMP法に、マクロライド耐性株のほとんどで認められる23S - rDNAの特異的ミスセンス変異を認識するPNA (ペプチド核酸) を加えて反応させるPNA-LAMP法を確立したもので、すでに *Journal of Microbiological Methods* 誌にアクセプトされ掲載論文となっている。

論文審査の冒頭で、申請者はその内容を中心に30分間のプレゼンテーションを行った。そののちに質疑応答を行った。審査のなかで臨床現場での治療薬決定に活用できる速度感があるか、また他の抗菌薬に対する耐性株が出てきた場合にも応用できるかなどの臨床面での質問、また検査法としての正確性などをふくむ基礎面についての質問等があった。これに対して申請者は円滑に自分の考えを述べ、適格に応答していたものと考えられた。

総じて申請者は実験方法等ならびに検討成績について円滑に説明ができ、また周辺領域についての見識も充分であり、上記の質疑に対しても適格に返答をしていたことより、学力面でもまた研究者としての姿勢も医学博士として認められるに充分であるものと考えられ、審査員全員が一致して、酒井純先生の本論文は学位論文として適格であるものと判断した。